■リレー随想①

わが青春の共学記

近藤総子（高4回）

実は、この原稿の依頼を受けたのが七月の初め、二度目のロシア旅行を控え、慌しさの真っ最中であった。「思えば遠くへ来たもんだ」という歌ではないが、いまあらためて高校時代を思い起すのは、飛行機の窓からシベリアの大地を見るようにまるで焦点が定まらず、我ながら情けなくなった。何しろすでに五十年以上の歳月が経ち、古希にまで達した現在なのだから……。

昭和二十四年春、私たち女生徒二十数名は、飯田西高併設中学（旧飯田高女、現風越高）及び市町村の新制中学から、試験を受けて飯田東高（飯田高松高→飯田高）に入学した。二年生、三年生にも四、五人の女生徒が転入したが、何といっても私たちは初めて、一年生から卒業までの三年間をここで学んだ、いわば、"共学元年生"なのである。敗戦後の学制の変革はめざましく、まず旧制から新制へ、つづいて男女別学から共学へという過渡期に遭遇したのがまさに当時の私たちであった。

私たちが男子校へ行ったのは、決して興味本位からではなく、さりとて男子と堂々と張り合おうなどという理想に燃えていたわけでもない。やはり時の流れに押されたというのが妥当な線であろう。気が付いたらもはや戻る道はなく、進むしかない現実のなかで、私たちは団結し、また個々においてもさまざまな試練にチャレンジすることとなった。

まず、入学したばかりの最初の一学期は、校舎の最も東側の教室に女生徒だけが集められ、石原先生の指導を受けた。授業は、これも飯田高の先進的方針で選択制と単位制を主体としたため、教科が変るごとに廊下を移動し、教室のメンバーも変った。二学期からやうやく女子もホームルームに配分され、私はC組、木下洋二先生のクラスになった。私の選んだ教科を中心に担当教官を上

●こんどう・ふさこ
昭和31年名古屋大学文学部卒。同33年同大学院修士課程修了。名古屋商大経済学部助手（3年）、金城学院教諭を経て同50年に上京して戸板学園（社会科）講師に。現在、短歌（林間短歌会所属）会報の編集・校正を手伝う。

げると、国語は前述の木下先生、数学―伊沢先生、英語―長沼先生、社会―林先生、化学―伊藤先生、音楽―金子先生、体育―村松先生等々、さらに二年ではH組木下先生、三年はB組市瀬先生の担任クラスで、どの先生も熱心ですばらしい授業をして下さったことに心から感謝している。

一年、二年では、班の活動などにもすすんで参加し、のびのびと学生生活を送った私たちも、三年ともなればそれぞれの進路を決め、受験勉強に励まざるを得なくなった。学科の試験と平行して行なわれる模擬テスト、数学の藤原先生の檄文とともに発表される科目別順位表で自分の学力がすべて人前に曝される。理数系の弱い私など総合順位がいまひとつぱっとしない。さらに進学適性検査なるクセモノもあり、雪の降るすごく寒い日に伊那北高校まで行って受けたことも思い出のひとつである。やっとの思いで国立大一期校に受かった時は、ゴールとスタートが同時だという感慨を胸にした。

なお、昭和二十七年（高4回）の大学合格率がずい分高かったのは、ひょっとしたら女生徒なんかに負けてたまるかと、男子諸君も己に鞭打った所為ではないかとひそかに思うのは私だけだろうか。

ここで校内における当時の女生徒の活動を少し記そう。

その一、家庭科の授業―共学校でも必要な教科との配慮から、風越高の前沢先生を招き、被服や調理実習が行われた。一階に設けられた男子禁制（入って来なかっただけ？）の小さな部屋からは時に明るい笑い声も聞こえた。

その二、体育の授業―陸上部やバレー部に属するものもいたが、少人数のためほとんど成果が上らず、水泳が必須単位となった時、女子だけ一緒にやらせて貰えるよう教師に強く申し入れを行い、実行が可能となった。

その三、運動会などのダンス―下級生の女子との合同で男子校では決して見られないダンスの集団演技を行った。

飯田高松高校４回生女子の卒業写真（昭和27年３月）

最後に私たち女子だけの卒業写真をお目にかけよう。制服こそなかったが何と晴れやかな表情だろうか。しかしこの中から三人、他にも二人、すでに他界したことはなんとも残念でならない。